津輕の彼方

和泉生

是非一度と念願してゐた北海道へ、去る三月上旬、冷害地方救濟土木事業の中間監査に好機を惠まれた。

幸ひ、北海道廳の大土木主事に榮轉以來、初上りの山崎君が、歸廳を無理に一日延期しての同道は、遠に心强く且つ樂しいものであつた。

上野驛から靑森驛まで十三時間餘。憩ふ間もなく連絡船に乘込み、一路函館港に向つた。嘗ては、流行歌によつて、浪の華散る津輕を越えて、一世を風靡した此の海峽も、月月、火、水、木、金金の至誠に心せば、一入北海の荒濤の感が深い。

三月餘りで、すつかり港屋タイプに馴染んだ山崎君が、飛沫に濡れる甲板に私を誘ひ、霞む函館港一帶の海岸線を見廻しながら、色々と海に關する新知識を注射して呉れた。特に、船舶噸數の判定に就ては、懇切丁寧を極めたが、始終、手帳と首つ引の態であつたから、實用向かどうかは保證の限りでない。襖一重を隔てて居れば、嘸や、名講義であつたらう。

汽車や連絡船に搖られてゐる間は、初見參の北海道に對する研究心も、好奇的に旺盛であつたが、上陸第一歩出迎えの木村君に變更の日程表を示された時は、何だか慌しいコースなので、生じつかの發心も五分通り冷めてしまひ、全道の廣汎を悟つては、最早九分どころ潰へてしまつた。

白雪が失せ、自動車が鈴蘭の香匂ふ高原を縱橫に驀進出來るとすれば、經過地のポイントは、たとへ、短時間の餘裕を慥えても拾ひそうだが、明朗でもない汽車を殆ど利用し、只管軌條面を軌るに於ては、諦められぬを、諦めねばならぬのも、亦已むを得ないであらう。

こんな譯で、遂に、看板に恥ずる貧弱な構成に終つてしまつたが、結局、夕食時の漫談や、車窓に映る幻像を、熟慮勘考の暇なしに蒐集したことに盡きる。

○

啄木の碑

しらじらと、水かがやき
千鳥なく
釧路の海の冬の月かな

此の歌碑は、釧路市知人岬（しれとみさき）の丘上に在る。此の丘陵に登れば、釧路港の内外を一望に收め得るし、夜景は殊更佳い。

これは、釧路の海の月が實に美しく清く澄み、世界無比なりと感嘆しての句とか言ふことであるが、事實はそうでないらしい。釧路の街は、もと〳〵、霧の街として知られ、港も丘も、そして、人家も全て濃霧に隱蔽され、年の半ばが燻つた雰圍氣の虜となる。斯ふした環境に喘ぎ苦しむとき、稀に澄み渡る大空に、左程でもない月光を仰ぐとすれば、多感の士ならずとも。歌や詩の一つ位湧き上らうと言ふものだ。況んや情熱の詩人啄木である。月には千鳥が附きものと、素晴らしくやつてのけたものと推察される。私は、此の歌碑の前に佇んで、案内の地元の某氏に、ここら邊りに千鳥が鳴きますかと訊ねると、頼りない返事をされ、痛く落膽してしまつた。

明治の末期、絶大なる抱負と希望に燃えて渡道した啄木が、不遇に喘いだ揚句、釧路新聞社に招かれたものの、文化の光の薄い地方のこと故、日毎の單純な生活に飽き飽きして仕舞ひ、淺酌低唱を極度に嗜み、若き美妓、小奴さんとのローマンスも、此の時に生れてゐる。二人の愛情は、艶聞に叛き、兄妹の如く清純であつたと謂ふが、斯んなことを附け加へることは、要らぬ御世話であり、野暮の骨頂かも知れぬ。

啄木は不幸にして夭折したが、小奴さんは今尚健在で、釧路市内隨一の稱ある近江屋旅館の主人公である。私は、是非此の婦人に面接し、情熱の詩人啄木の若き日の眞の風貌の一片たりとも探り、せめて、小奴時代の面影をもとの望みも、不運な手違ひで敢へなく水泡に歸し、寂しくも、啄木が主筆たりし赤煉瓦の粗末な二階建の窓硝子を、車中から一瞥したに過ぎなかつた。此の赤煉瓦の建物は、今こそ、廢墟めいた存在にしか見受けられないが、明治四十年頃としては、おそらく、當地屈指の近代式なものであつたに違ひない。

啄木の墓碑は、彼の義兄に當る郁雨氏の肝煎で建立されたもので、函館市の海岸の丘陵なる立待岬の墓地内に異彩を放つ。

墓碑の表面には、人口に膾炙されたかの、「我泣きぬれて蟹とたわむる」が刻まれ、其の反面には、彼の書簡の一節が次の如く載せられ、函館市に對する彼の執着振りと、性格の片影が伺はれる。

これは嘘いつはりもなく正直に言ふのだ。

「大丈夫だ、よく〳〵おれは死ぬ時は函館へ行つて死ぬ」

その時斯ふ思つたよ、何處で死ぬかは元より解つた事でないが、僕は矢張死ぬ時は函館で死にたいやうに思ふ。

君、僕はどうしても僕の思想が、時代より一歩進でゐると思ふ自惚を捨てることが出來ない、

明治四十三年十二月三十一日

東京市本郷弓町二五八

石川啄木

耶雨兄

啄木と同好の士であつた都雨氏は、今も函館市に居住し、某名譽職に在りつゝ、相變らず其の道に勵みつゝある。

函館市といつても、五稜廓と立待岬を觀るとあとは何もない。併し、青森港への連絡船には、未だ少々時間があつたので、勸められるまゝに、市立圖書館を訪れた。圖書館なんて、がらにもないと嗤はれるかも知れぬが、函館土木現業所の中邑君から洩された、啄木の滯道日誌に心牽かされたのである。

生憎、館長が不在だつたので、係員に其の旨を訴へたのであるが、頑として應じて呉れなかつた。彼の申立は、あの日誌は、未だ誰にも閲讀させたことがないから、折角だが斷るといふことだ。

誰にも閲讀させぬ理由は、あの日誌は、極く赤裸々な筆致で綴られ、其の上、日誌の人物が多數現存してゐるので、若しや、差し障りがあつてはとの懸念からであつた。

こう言はれてみると、尙更讀んでみたいのが人情である。私は、あの手この手と粘つてみたが、向ふ樣は石の地藏さん。無念だがどうにもならなかつた。私は大人氣なくも氣を廻した。必つと日誌の頁は、小奴さんの記事で彩られてゐるのではなからうかと……

○

珍名

北海道に旅して最も難澁するのは、何と言つても、地名と驛名の讀方であらう。もと〳〵、アイヌ語から發してゐるので、讀み難いのも無理じやなからうが、其の中には、うつかり大聲では喋れない樣なものも尠くない。

下頃部（したころべ）、砂念頃（さねんころ）、數生（しきふ）、邊別（べべつ）、狩太（かりふと）等が、其の代表的國有鐵道の驛名であるが、何れを取上げても感心出來そうもない。取分け、「邊別」の電報事件は、些か馬鹿氣たつぷりの漫話であるが、其の眞僞は別として一應頷かれる。筋は極めて幼稚であるが、發表は場所柄差し控へよう。

旅行者が耳にして、羞恥や不快を覺える驛名ならば、其の衝にある鐵道當局が無神經で居られる筈がない。先般、「乘客に不快の念を抱かしめる」との理由に依り、砂念頃驛が、御彩驛と改稱されたのは、遲蒔き乍ら適當な措置と申したい。また敷生驛も近近新しくスタートするさうだが、御尤も至極であらう。

北海道が、アイヌと熊との離れ島としての時代ならば、アイヌの語源を尊重しての驛名も敢て不思議でもなければ、また不可解でもないが、今はそんな時代でもあるまい。眞道、驛名の改稱に依つて、北海道らしい旅情が消滅すると、つまらぬ抗議立をする者も無いと思ふが。

次に、現在の地名が、アイヌ語ではどんな意味を含んでゐるかを紹介し、遠きいにしへの想像をも折り混ぜて、現地を檢分すれば、成程と首肯出來る。主要都市を列べて御參考に供したい。

野付牛（のつけうし）　野の端
札幌　乾きたる廣き場所
函館　灣内の端
小樽　小石の川
旭川　日出づる川
室蘭　緩やかな坂道
釧路　咽喉
根室　樹木繁茂する處

夕張　峰の多くの集り
稚内　飲水の澤

○　亡び行く民族

今から二十年程前、北海道に居住するアイヌ人は、悠に五萬を算したとの傳へも、現在では、僅僅一萬五千人を出でぬ狀態である。二十年間に於ける此の著しい減少率は、やがて彼等民族が亡び行く運命にあることを暗示するものではなからうか？

アイヌ人は、北海道の他に、南樺太にも一千六百人の血緣が寂しく生存して居る。それ以外は、世界の何處にも彼等の姿を發見することが出來ないのである。

彼等民族は、嘗ては本州及シベリヤの廣汎な地域に亙つて生存してゐた種族であり、其の使用する言葉の語脈、慣用句等の特徴に依つて、北歐種族アールヤ人種と、系統を同じくするのではないかと想像されるさうである。とすれば、彼等の一團が如何なる時代に樺太及北海道に根蔕を占めたかを究めたいのであるが、文字の記錄が無い爲に、それは殆ど不可能と言ふべきであらう。

アイヌ人は、往昔「毛人」と稱せられた如く多毛であつて、熱帶人種の感じよりも、其の眼や體色を凝視すれば、毛唐臭い感じの方がずつと強い。それ故、往古アイヌ人が熱帶地方から本邦に

渡航したとの巷説は、私には疑念を抱かしめる。從つて、アイヌ人が地理學的又は言語の特徴に依つて、北歐種族ならずやとの推定は、前者に優るものであると確信する。

アイヌ人は文字を有しない。諸事口傳に依つたので、其の傳說等に就ても、何等纒つたものがなかつたのであるが、偶偶、釧路舊アイヌ人の山本多助氏が、釧路市春採土人學校五學年卒業の知力に精魂を傾け、祖父母に聞かされた少年の頃からの物語や、古老に敎へられた傳說を、數年の苦鬪を經て書き上げたのであるが、其の最後の日は、彼の獨り子の日出男君を、釧路病院で亡くしてゐる。回顧すれば、それは、阿寒おろしの吹荒ぶ昭和十四年一月の出來事である。

其の後、日本旅行協會の援助の下に、「阿寒國立公園とアイヌの傳說」と銘打つて刊行したのが、昭和十五年七月である。

山本多助氏の傳說は、阿寒湖を中心として、彼等民族と猛獸との爭鬪史と見て間違はない。「人喰ひ熊と老婆の話」、「神岳征服のカムイマ兄弟」、「大蛇と荒熊の鬪ひの話」等がそれである。然し、數多い傳說中、「セトナと毬藻の話」は、平凡乍ら、哀戀嬝嬝として佳品の香りあるものと言ひたい。

「昔のことでありました。阿寒湖の西岸に、モノッペといふ部落がありました。そこに、シツパチと呼ばれる偉い酋長が居り、其の娘にセトナと呼ぶ美しいピリカメノコ（妙齡の美人）がありました。そのセトナも十六の春を迎へ、愈愈婚定めの日が訪れました。そして、花婿に定められたのは、副酋長の次男メカニでした。メカニは、村一番のやくざでしたから、セトナは心よしとせず、自分の家の下僕であるマニペを心祕かに慕つてゐました。マニペは、勇敢で氣だてのよい青年だつたのです。

そのことを知つたメカニは、惡巧みをおこし、マニペを亡きものとしようとして力及ばず、却つてマニペに殺されてしまつたのです。マニペは此の怖しい殺人をつくづく後悔しました。

そして、マニペは、翌日舟を遙か湖上に漕ぎ出して、日頃いつくしんでゐた蘆笛を此の世の名殘りに、心ゆくまで吹きならし、哀れにも湖水に身を投げました。

いく日か過ぎて。マニペの死を知つたセトナは。耐へきれぬ悲しみに沈み、湖岸に佇んで物思ひにふける日が幾日か續きました。或る日、セトナも丸木舟を湖に漕ぎ出したまま、二度と其の美しい姿を部落に見せなかつたのです。そして、阿寒嵐の吹きすさぶ夜には、セトナのむせび泣く聲に和して、マニペの哀しい蘆笛がきこえるのです。

其の後のことです。

阿寒湖には、戀する二人の心が一つになつた毬藻が浮び漂ふ樣になりました。」

アイヌ人と言へば、直ぐ熊と組打ちする野蠻的な場面を聯想す

るが、あれで、仲仲詩情たつぷりな所がある。彼等は、大變歌を愛し、踊りを樂む。小學生でも、唱歌にかけては、內地人兒童を凌ぐさうである。山本氏の調査した歌は、八十種類にも上り、戀を歌つた哀婉なもの、武勇を歌つた豪快なもの、人情風俗を讀んだもの、或は、アイヌの歷史を歌つたものなど色色あるが、最もやさしい小唄を、山本氏の解說に基き揭げよう。

櫻の唄

カルンパ　アペツポ　ピラ　シケワ
キムン　チカツカ　ハウエ　サンケ
ペイカラ　エツ　ルイネ　ペイカラネナ

（譯）櫻の花がぱつとさき
山の小鳥も歌ひだす
春が來たのだ　春なのだ

初夏の唄

イヨウ　ハア　イヨウ
イヨウ　マナイ　ネエ
イエ　トコタア　イポンケ　ネタイ
イヨリップナ　シユウ　ウエ
イヨウ　ハア　イヨウ

（註）此の歌は、やわらかい感じと、爽やかな氣分にさそう歌です。歌ふ人は、河邊の丘に立つて、川下の一面のハン樹林の若葉が、川風に高く低く搖れ合ふのを眺めて歌ふのです。

（譯）春の海面を吹くそよ風よ、遠くの森は遠いままに、近くの森は近いがままに、そよそよと搖れて、青い衣裳をまとつた天女の舞かといふのです。

アイヌ人は、無性に酒浸りをする。酒や燒酎の爲なら、酷い犧牲をも顧る所がない。北海道開拓當時は、其の爲に多大の財物をふいにしたといふことを聞いたが、最近では、かなり自省した生活をしてゐるらしい。彼等の仲間でも、青年層に屬する男女は、小學校の課程は終了してゐるし、態度も仲仲瀟洒なものだ。街路や驛で擦違つても、餘程注意深くなければ、一寸見分けがつかぬ程である。

彼等は、內地人を和人と呼んで尊敬し、殊に、女性に於て然りである。然し、內地人はアイヌ人との結婚を嫌ふこと絕對的であつた。さりとて、遠くて近きはのきまり文句通り、いつしか、丸く纏る緣組が此處彼處に展開し、アイヌの血は淨化されつつある。これこそ、幸福と希望の彼方に躍進するアイヌ民族の亡び行く姿であらう。